

新・第6話「青信号と雪の朝に」

自転車を、必死にこいでいた。
雨が降ってきた。空は低く、心も少し冷えていた。
頼れる父母はいない。
頼ってはいけないと、どこかで思い込んでいた。
だから、こぐしかなかった。

途中で、ふと「少し休もうか」という考えがよぎった。
でも、すぐにかき消された。
先生のところに行かなくては。

あの人に、会わなければならない気がした。
先生は、信頼できる女性だった。
早期退職されてからは教壇に立たず、英語を学んだあと、
絵手紙などの趣味の世界に移られた。
その姿には温かさもあったけれど、私はどこかで、飽き足りなさを感じていた。

雨が、やがて雪に変わった。
空一面から、小さな粒が音もなく降ってきた。
雨粒が、そのまま雪の粒に変わっていった。
冷たくて、でも、どこかとてもきれいだった。
少し泣きそうな気持ちになった。

そのとき、遠くの信号が青に変わった。
なぜかわからないけれど、それはたしかに「救い」だった。
あのまま進んだら、きっと——間に合った。
そう、夢の中の私は信じていた。

……目が覚めたとき、
私は、猫たちと一緒にまどろんでいた。
夢の中の私は、たしかに必死だった。
寒さと孤独、焦りと意志のあいだで揺れていた。

でも、いまの私は、
進むことが少し、楽しい。
どこまでやれるか——
残された年月と、自分の歩みたい道と、
静かに、誠実に、競争しているような気がする。

それはもう、誰かに命じられてではなく、
自分の意志で選び、こいでいる人生だ。

雪は、たしかに降っていた。
でも、とても、きれいだった。

そして、青信号は、
今も胸の奥で、そっと光っている。